

## Handai Hospital

## 地域と連携 密に

## 24時間体制 年500件診療

阪大病院に脳神経外科や神経内科、高度救命救急センターなど診療科の枠を越えて24時間体制で脳卒中の治療にあたる脳卒中センターが発足して5年になります。最近では年間約500件の診療実績があり、脳卒中治療には不可欠な地域の医療機関との連携も密接になっています。超高齢化社会で今後、ますます増える脳卒中の診療に同センターの果たす役割はより重要になってくると思われます。

## 脳卒中センター発足5年

脳卒中は発作が起きたら、できるだけ早く医療機関に搬送し、緊急に診断、治療することが求められます。同センターは脳卒中の専門医が24時間体制で対応し、地域の医療機関や救急搬送、院内での発症患者さんを受け入れていきます。5年間の診療実績はグラフの通りです。

脳卒中の治療はtPAという薬剤による血栓溶解療法や頸動脈内の閉塞したところにステントを留置する治療法が保険適応になり、早期に対応できれば後遺症も少なく治療できるようになっています。脳動脈瘤に関しても、患者さんの体に負担の少ない血管内治療も積極的にを行っています。

また、大病院の特徴として、各診療科の専門医が患者さんに関して週1回の合同カンファレンスを開いて、最適な治療法を検討しています。市中の病院では診断、治療の難しさが併発する脳卒中に際しても治療実績を積み上げています。脳卒中は急性期治療だけでなく亜急性期か



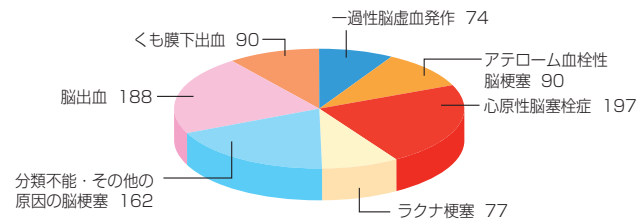
最適な治療法を検討する合同カンファレンス

ら慢性期のリハビリも重要です。同センターではリハビリテーション部と協力して早期にリハビリを行い、後遺症をできるだけ少なくするようにしています。特に飲み物や食べ物の飲み込みに関するリハビリ、嚥下リハビリは歯学部との連携で治療

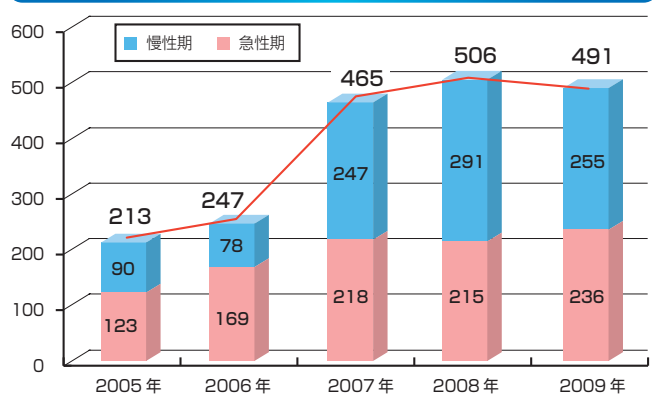
後の早期から行い効果を上げています。脳卒中センターにはこのような急性期の患者さんを専門に診るSCU(脳卒中集中治療室)があり、脳卒中看護に習熟した看護師がケアにあたっています。センターではできるだけ多くの患者さんの

治療を行うため、入院日数を少なくして、地域の回復期リハビリテーション病院内に転院していただくような病型や重症度に応じた6種類の治療マニュアル、急性期パスを作成して効果的な治療、ケアを行っています。

脳卒中センター開設以後5年間の急性期脳卒中症例の内訳(総数878例)



5年間の受け入れ患者数



「阪大病院脳卒中センターダイレクト」という活動報告を定期的に発行し、センターに対する理解を深めていただいています。また、社団法人「日本脳卒中協

会」の大阪府支部としての役割もあり、「脳卒中対策基本法」制定を政府に要望するなど啓発活動も行っています。平成22年度には医学部附属病院重点課題と

して脳卒中センターを充実させるために、SCUを増床してさらに多くの患者さんを受け入れられる体制を整える計画です。



福澤正洋・新病院長就任

## 真心で信頼得よう

阪大病院の新病院長に小児外科の福澤正洋教授が就任しました。福澤病院長は、大病院の三つの柱である臨床、研究、教育をさらに充実させることはもちろん、医療の質と安全のさらなる向上を目指し、医療スタッフと患者さんが良好な関係を保ち、患者さんに満足していただける医療を提供できる「こころと夢のある阪大病院」を築いていく、と抱負を語りました。

療拠点病院」に認定されました。これらのセンター機能の充実を図るとともに、さらに診療機能をアップさせるために新たなセンター構想を推進させていきます。

これまで以上に医療従事者への安全教育が必要であり、患者さんに満足していただく医療を行うためには責任を自覚して患者さんに接していくように指導していきます。

実際の診療におきましては、難易度の高い手術件数が増えており、外科系診療科医師や看護師らのレベルアップと手術部の強化も課題です。小児からの臓器提供などを盛り込んだ改正臓器移植法が7月に施行されます。当院は全臓器移植ができる数少ない病院であり、移植手術の増加も予想されますので、スタッフと施設の充実が急務ともいえます。

地域との連携もこれまで以上に緊密にしていかなければなりません。保健医療福祉ネットワーク部を中心に、紹介患者さんの受け入れや、退院支援などを充実させるとともに、地域の医師のための研修会なども開催し、地域医療のさらなるレベルアップを図っていきます。

研究におきましては、新薬の大規模臨床試験や医師主導の先端的治療の臨床試験などを積極的に行っていきます。

また、医学部との連携だけでなく総合大学としての利点を生かし、工学部など他学部と協力して新たな医療技術を切り開いていきたいとも考えています。

教育も大病院の重要な役割です。卒業臨床教育システムが大きく変わり、全人的医療ができる医師の育成が目標になっていますが、阪大病院での初期研修は高い評価を得ており、さらに質の高い研修を行っていきます。さらに、中堅の専門医を育てるために卒後教育開発センターを設置するとともに、文

阪大病院は国立大学法人化後、国からの運営交付金が減らされるという厳しい財政事情でしたが、地域の中核病院としてだけでなく、先進医療を実施、開発する病院として機能を強化し、患者さんのニーズに添えてきました。特に各診療科の枠を越えた脳卒中セ

ンター、前立腺センターやハートセンター、小児医療センター、総合周産期母子医療センターなど診療専門別のセンター化は成果を上げています。一昨

年4月にスタートしたががんを集学的に診るオンコロジーセンターはその活動が評価され、阪大病院が「地域がん診療

来医療センターがあります。すでに再生医療の臨床試験なども行っており、これからは日本だけでなく世界の医療をリードするセンターとして発展させていきたいと考えています。

医療の安全も大きな課題です。阪大病院は中央クオリティマネジメント部

医療の安全も大きな課題です。阪大病院は中央クオリティマネジメント部

医療の安全も大きな課題です。阪大病院は中央クオリティマネジメント部



## みんなのいろはうた キャンペーン！ 5月中旬からスタート

阪大病院では、5月中旬から「みんなのいろはうたキャンペーン」を開始します。このキャンペーンは、患者さんの医療および医療安全へのより積極的な参加をお手伝いし、患者さんと医療者とのパートナーシップ（協働）を深めることを目指しています。

キャンペーン期間中、入院患者さんには、いろはうたファイルセットをお渡しします。ファイルには、患者さんと医療者が共に大切に考えたいポイントを「いろはにほへと」の七つの「うた」に詠み、印刷しました。

掲載している「うた」やイラストは当院のスタッフの作成です。キャンペーン期間中は、病院職員も共通のバッジを着用しております。いつでも遠慮なく声をかけてください。



## 大地震想定し、大規模災害訓練



大規模災害時の負傷者受け入れのための訓練が2月22日に行われました。阪大病院は大阪府の指定する災害拠点病院で、北摂地域のみならず、大阪府、さらには近畿地方で発生した災害時において医療活動の中心的な役割を果たすために欠かせない訓練です。

訓練では、近畿地方で震度7の地震があり多数の方々が被災し本院に救急搬送される、という想定のもとに実施されました。次々と模擬患者が搬送され、診療受付、災害時用のカルテの作成、そしてトリアージにより負傷者の緊急度と重症度を判断し写真、緊急治療を行った後に災害対策本部が中心となり収容先を選定する、という本院の災害マニュアルに沿った手順の確認と情報伝達が行われました。

## みんなで「ボニョ」も合唱 センチュリー響アンサンブルコンサート

大阪センチュリー交響楽団有志の方が小児医療センターで2月3日にアンサンブルコンサートを開催してくださいました。このコンサートは平成15年より「府内支援学校コンサート」でボランティアとして行われているものです。「クラリネットを壊しちゃった」など子どもたちのよく知っている曲を演奏してくださり、アンコールでは「崖上のボニョ」をみんなで合唱しました。



## ハンマーダルシマーの優しい響き



春のミニコンサートが4月2日に開催されました。阪大病院眼科の高静花医師がハンマーダルシマーという日本ではあまり知られていない打弦楽器を演奏しました。音はハーブのようで、やさしい音色がエントランスいっぱいに響き渡り、皆さん珍しい楽器に魅せられ、うっとりとして聞き入っていました。

## 総合診療外来横に多目的トイレ

阪大病院では、外来棟1階総合診療外来横に多目的トイレを設置しました。ご意見箱に寄せられた「多目的シート※の設置を」などの要望に応えたものです。



トイレ内は広く車いすが楽に移動でき、多目的シートやオストメイト対応汚物流しの他、ベビーチェア、フィッティングボード、全身鏡も設置しています。室内の照明は明るく暖かみのある光で、木目を基調とし落ち着いた空間を作り出しています。また、節水型便器やLED照明を採用することで、省エネにも貢献しています。

※成人、障害者のおむつ交換用ベッド。

# 唯一の全臓器移植認可施設

## 移植医療部



阪大病院の移植医療部は院内の移植医療のヘッドクォーターの役割だけでなく、日本で移植医療をさらに普及させるための活動も活発に行っています。阪大病院は1980年代から脳死臓器移植の実

施に向け精力的に準備を進めてきました。現在では全臓器の移植実施施設として認可された全国唯一の病院です。1997年の臓器移植法施行から2010年3月末までに脳死臓器移植を受けられた270例のうち約4分の1にあたる65例が阪大病院で移植を受けておられます。1日に4件の脳死臓器移植を2回、3件を2回も実施した経験もあります。また、骨髄移植や造血

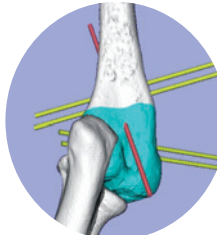
血幹細胞移植も内科や小児科を中心に精力的に進められ、さらに、海外で心臓移植などを受けられた子どもさんたちのフォローアップも行っています。写真、移植医療部にとって重要な役割です。また、移植が行われるときには手術部などとの調整もし、移植がスムーズに実施されるようにしています。



骨折によるひじの変形の矯正手術

小さいときに腕を骨折してその後遺症によって腕が変形してしまったり、先天的に腕が変形してしまったりしているのを矯正するのは難しかったのですが、阪大病院整形外科では医工連携によって3次元のCT映像と新しい造形技術を組み合わせた手術法を開発。全国から患者さんが治療を受けにきています。

骨折の後遺症などで四肢の骨が変形してしまったりと見かけが悪いだけでなく、関節の動きが制限されたり、痛みなどの原因になったりします。そのために、ある程度以上の変形に対しては矯正手術が行われてきました。従来の手術は単純レ



骨切面上を回旋ワイヤーが平行になるまで折してその後遺症によって腕が変形してしまったり、先天的に腕が変形してしまったりしているのを矯正するのは難しかったのですが、阪大病院整形外科では医工連携によって3次元のCT映像と新しい造形技術を組み合わせた手術法を開発。全国から患者さんが治療を受けにきています。

この手術法は四肢の長い骨の変形矯正に特に効果的です。骨折などで四肢が変形して手術しても矯正がうまくいかなくて困っておられる方はぜひご相談ください。

## 骨折変形あきらめないで

「カードを所持していないだけでも家族の同意があれば臓器提供を認める改正臓器移植法が施行されます。脳死移植の増加が予想されますので、移植医療部の活動がさらに重要なものとなってきます。また、院内の活動だ

けではなく、脳死臓器移植のものを一般の方にもよりよく知ってもらうために、今年3月に市民公開講座「いのちのリレー」臓器移植の未来」を開きました。さらに、日本の移植医療を発展させるために、日本臓器移植ネ

ットワークからの委託で新たに採用された移植コーディネーターの研修も行っています。移植医療部では「心のこもった移植医療の実現」をモットーに日本臓器移植医療をバックアップしていきたいと考えています。

レントゲンの2次元画像をもとに、どのように骨を切ればうまく変形を直すことができるかを検討してきました。2次元の画像では矯正後のようなになるかの予想が難しく、骨を切るのには「職人技」が必要で、すべてがうまく矯正できるとは限りませんでした。

すでに矯正シミュレーションのソフトも開発し、患者さんの変形に応じて微調整ができ、カスタマイズの手術部材も矯正シミュレーションから簡単に製作できるようになりました。

援器具を設計、製作することに成功しました。この手術部材は切断する部分に固定します。スリットに沿って骨を切り、スリットの上下に突き出た細い4本の棒が平行になるように回転させれば矯正ができるのです。

メタボリックシンドローム合併がん患者に対する全人的アプローチ



## メタボ合併がんで 臨床試験

### 補完医療外来

機能的食品（いわゆる健康食品）や鍼灸などを用いる補完代替医療に関する臨床試験を行い、患者さんからの相談も受け付ける補完医療外来が阪大病院でスタートして約4年が経過します。毎月4、5件の相談があり、臨床試験も月に30、40例を数えています。

現代医療において現代医療と補完代替医療とをうまく組み合わせるためのケアが必要になります。

的な医療、すなわち統合医療が注目されています。補完医療外来でもメタボリックシンドロームに合併するがんに関して統合医療の可能性を探る臨床試験を行っています。メタボリックシンドロームは特定検診で指摘されても治療しようとする意思は強く働きますが、がんを併発することによって治療しようという動機付けになります。